

平成二十七年年度 高校推薦入試 作文問題

次の文章は「外国人記者が見たTOKYO」というテーマで掲載された新聞の記事です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

外から見た東京は――。2020年東京五輪・パラリンピックに向け、都は10月末までの6週間、海外から6人の記者を招き、東京取材してもらおう新事業を実施した。海外へ東京を発信するのが狙い。記者たちに「Tokyo」はどう映ったのか尋ねた。

6人は米国、カナダ、インド、シンガポール、香港のフリーの記者。4人が初来日だ。都と日本海外特派員協会が協力し、応募した240人から取材実績や面接をもとに選んだ。

1964年東京五輪の50周年イベント、警視庁の遺失物保管状況など、記者の求めに応じて都が取材先を紹介した。記者たちは各国のメディアやブログなどで発信した。

「東京には、すぐに五輪を開催できる都市機能がある。清潔な街に、時間に正確で便利な鉄道。この目でそれを確かめられたのは貴重だった」。インドから来たサリサ・ライ記者(51)は語る。今回、東海道新幹線やファストフード事情を取材し、米経済誌「フォーブス」などに寄稿した。

「もっと多くの人が英語を話せばいい。表示や標識が英語で表記されればなおいい」と指摘した。公衆無線LAN(WiFi)はインドの方が進んでいると感じたという。

米出身で衛星放送「アルジャジーラ」インターネット版などに記事を書いているトーマス・ベンナー記者(55)は、スマートフォン利用について注文をつける。「海外からの旅行者が自分のスマホを使うのには手間がかかる。自分のものなら地図アプリを使って気軽に出かけられ、ツイッターで面白かったところを発信できる。日本にとって経済的な恩恵につながる。国や通信会社はすぐに考えるべきだ」

最年少のシンガポールのマリアン・モクタール記者(25)は新聞で社会面などに記事を書いてきた。「谷根千(台東区と文京区の谷中・根津・千駄木)」のルポや熊手などの伝統文化をブログで取り上げた。「私の国は面積が狭く、歴史や伝統のある地域まで開発されてしまった。都会の中で歴史を感じられる環境を、東京は大事にしてほしい」

滞在中、韓国・朝鮮人に対する差別をおおるヘイトスピーチ(憎悪表現)を目撃した。「時代に全くそぐわない。変えるのは難しいことだが、すぐに変えなければいけない」と話した。

各記者の記事は都の英語版ホームページ内の「DateLine TOKYO」に掲載されている。都は来年度も記者を招きたいとしている。

舛添要一知事は、20年五輪・パラリンピックに向けて海外への情報発信を強化するため、在京海外メディアや海外拠点の多い日本企業の広報担当者らをメンバーとする有識者会議を10月に設けた。会議の意見を参考に、都の英語版ホームページで東京の魅力を発信していくとしている。(松沢憲司)

(『朝日新聞 平成26年11月5日朝刊』より)

問 海外からのお客様を迎えるにあたり、あなたは東京のどのようなことを紹介していきたいですか。また、どのような点を直していったらよいと思いますか。具体的な例を挙げながら、あなたの考える東京の魅力、あるいは直すべき問題をまとめてください。(六〇〇〜八〇〇字・六〇分 題名などは書かずに行目から本文を書くこと)